

ガラス

Bブロックにエントリーされた全12作品を公開します。

覇者となったのは果たして誰??

<http://www.columnland.net/> にてごらんください。

「なあ、よく人の心の脆さを「ガラスのハート」っていったよっ」

「な、なんだよ教から棒に」

「いいから答えてくれよ。そういうだろう？」

「ああ、そうだな。でもそれがどうしたんだ？」

「いや、その「ガラス」が強化ガラスなら滅多に壊れることも無いからきつと強い心になれるんだろうなあ、って思ったわけよ」

「それならいっそ千タン合金製のハートにでもすればいいじゃん」

「・・・それもそうだな」

「というよりも、もし壊れない心を持った人がいるならそれはもう人間ではないんじゃないか、と俺は思うよ」

「そうかなあ。でもそいつはきつと何ものにも動じない強い心を持った奴なんだよ」

「ふーん。じゃあたとえるならばどんな感じの人？」

「鉄人28号」

「・・・人じゃねえじゃん」

「おお、そうだったな。まあ、ともかくそんな人がいたらどんな状況でも決してめげないんだろうなあ、って思うわけよ」

「そうかねえ。でも、俺は少なくともそんな「ガラス」は要らないね」

「どうしてさ？そんなに鉄人28号嫌い？」

「そこでなぜ鉄人28号を持ってくる！別に嫌いじゃないけど・・・ってそんな事はどうでもよくて！もしね、そんな「ガラス」持ったら人生絶対面白くないと思うよ」

「・・・そうかもなあ。なんか何にも驚かないっていうのは、よくよく考えたらつまらなそうだなな。」

「だっ？」

「・・・あーいい事思いついた！」

「何っでっつしたの？」

「だったら「ガラス」をある程度分厚くすればいいんだ！俺って頭いい！」

あなたの「ガラス」は何センチ？

ある一室

ふと気付くと、小さな見覚えのない部屋に俺はいた。

男が三人と女が二人いる。そのうちの体格のいい男一人とヒステリックな声上げる女が言い争いをしている。内容はどうやらどつちが先に外に出るかのようなようだ。下らない。勝手に出ていけばいいのに。そのうち女が強い口調で責め始めると、男の体はまるでガラスのように粉々に砕けた。あつげにとられて見ていると女はもう一人の女も同じように砕けさしてしまつた。するともう一人のおとなしそうな男が俺に食つてかかつてきた。幾度となく殺人を繰り返した凶悪犯罪者の俺を相手に口論を始めたので、一発どつてやるとそれも粉々になつた。部屋にはヒステリー女と俺とさつきからシングルソファーに座つたままびくりとも動かない男の三人だけになつた。するとおもむろに立ち上がったその男は女の首をつかみ、何か叫ぼうとする女に反応せず、壁にたたきつけた。女は粉々になり、ついに俺と二人になつた。男はまたソファーにこしかけ、おびえたような眼でこつちを見た。おれは無性にこいつをいじめたくなり、ソファーに近づいた。すると男は冷や汗をたらたら流しながら俺に向かつていった。

「消えろ」

すると俺は自分が蒸発するような、不思議な気分支配された。ああ、いまおれは粉々になつていつているのか……

「成功したようですね。」

ここは郊外にある療養施設。医師が患者に言う。

「あなたは自らの力で自分の中のほかの人格を追い払うことができた。おめでとう。」

「最後まで残つたあの殺人鬼の人格には苦勞しましたよ。いつものように逃げ出すところでした。ですがぶじ、追い払うことができました。ありがとうございます。」

そう、ここは多重人格者のための特別な施設。

ガラスケース

大学生活も落ち着き、駅前のとあるドーナツショップでアルバイトし始めてもう三ヶ月くらい経っただろうか。単調作業に近いここでの仕事は、『実習中』の名札を胸に掲げた物覚えの悪い私でも、さすがに一人前にこなせるようになってきた。最近ではお客さんと軽いコミュニケーションをとれる余裕まで出てきている。営業スマイルというよりも自然の笑顔だ。お客さんと私の間に居座るもの言わぬ冷たいガラスのショーケース。常連さんのぬくもりはいともたやすくそれを通り抜けて、私へと届いてくる。私の気持ちも、きつと届いてるはず。

彼がこの店によく来るようになったのは、私がここでアルバイトをし始めた頃だったと聞いている。いつのまにか私は彼に思いを寄せていた。彼が店の扉を開け入ってくるとわかるやいなや、胸の鼓動が大きく高鳴る。彼は決まっただけいつもストレートティーとキャラメルドーナツを注文するとわかっているのに、レジの前で「ごたごたとまごついてしまう。そんな私の彼に対する思いとは裏腹に、ガラスケースは冷たい。私の思いはそれを伝わらない。」

そして今日も彼がきた。久しぶりのような気がするのは気のせいだろうか。いつもと比べ、胸の鼓動の高鳴りが大きいのを感じる。しかし、彼はいつものように注文する。いつもと違うのは彼が、レジスターから出てきたレシートを見るようにと私に告げたこと。

「スキ…」

彼は今までずっとメッセージを送り続けていた。お互い気づくはずなんてないメッセージを送り合っていた。そして彼の思いは私へ届き、私の思いもガラスケースを伝わった。

夏幻の月

「ねえ……最後にさ、アレに乗らない？」

季節に似つかわしくもない、冷たい風が吹き始めていた。彼女が、その細い腕を上げてそつと指差したのは、宙に浮かぶ巨大な円環。銀の月を背景にゆっくりと回るそれは、俺の目にはどこか幻想的に映った。

俺は何も言わず、ただふつと笑ってそれにならずいた。本当に笑えていたかは分からない。うなずき返し、俺の手を取って歩き始めた彼女の表情は相変わらず、全てを達観したような微笑みだった。

シメはやはりこれ。考えることは皆同じなのか、そこには長蛇の列が出来ており、俺たちの立ったちようど脇には、ただいま五十分待ちの看板が置かれていた。——構わなかった、俺も彼女も。その五十分を、俺たちは止まることないお喋りで過ごした。そのどれも、二人が二人で歩いてきた日々……この、長いようであつという間だった二週間の想い出話だった。

——あの日、八月が始まったばかりの、焼け付いてしまいそうな昼時。お互い余所見をしていて衝突という、月9張りのベタな出逢いが、俺たちの始まりだった。

小さくて、元気がよくて、でもどこか硝子細工を連想させる儂げな感じ……。それが、どこかに落としてしまった『大切なもの』を探しているという彼女に、俺が抱いた印象だった。そんな彼女をなんとなく放っておけず、探し物に付き合っつて夏休みを過ごすうちに、俺の彼女への想いは少しずつ育っていったのだった……。

そう、それだけでよかったんだ。ドラマみたいな手の込んだストーリーなんていらぬ。このほのかな想いと、彼女と一緒にいられるだけで、俺は満足だった。それなのに、どうして——

ようやく順番が来て、ちようど降りてきた赤のゴンドラに二人で乗り込みながら、

きつと、と俺は心の中でつぶやいた。

——今日が、このドラマの最終回なんだ。この観覧車が、俺たちのラストシーン。

扉が閉まる。瞬間、二人のあいだの会話がふつと消えた。控えめなはずのBGMが煩いほどの静寂。息苦しさに何か言おうとして、息苦しさに言葉を詰まらせる。窓の外夜景と、空に浮かぶ月を見ながら、俺が何回かそれを繰り返した頃……、

「ねえ……」

彼女が口を開き、俺は微かに身体を震わせてそちらを見た。白い微笑み。彼女の双眸が、月明かりを返して輝いていた。

「ありがとう、本当に……。彼のことも、落とし物も——私のこと、助けてくれて」

——気付いてたのか。俺は何も言わず鞆に手を入れ、一本のネックレスを取り出して彼女に差し出した。それが、未だ彼女をここに繋ぎとめている鎖……。

もう、俺は全部分かっていた。彼女がまだこつちにいた理由——付き合っていた彼女、手放してしまった宝物。その二つに、彼女が残していた未練。でも——

「行けるんだよな……。もう、これで」

ネックレスを握る手が、問いかける声が微かに震える。彼女は、まだ手を膝に置いたまま——しかし、確かにうなずいた。

「すぐく楽しかった、キミといた時間。絶対ありえなかった時間を、ありがと——」

——もう私、何も未練ないよ……。

白い手でネックレスをそつと掴み、そのまま彼女は、俺に身体を寄せてきた。涙を湛えた笑顔が近付き——微かな感触だったけど、確かに、彼女は俺に触れた……。

「ずつと……見守ってるからね」

離れていく彼女の姿が薄れ、同時に歪み、滲む。それでも俺は、彼女に笑顔を向け続けた。彼女も、最後まで笑顔で……。

「ばいばい——」

……彼女の姿が、消える。

「おやすみ……どうか安らかに……」

涙を拭い、俺はそつと祈った。硝子の月が、優しく俺を包んでくれていた。

ガラスの靴

幸せの代償は
靴擦れによるマメと
ムレによる水虫

ガラスのおっちゃん

おっちゃんの家は学校の帰り道。ぼっさぼっさの売れない漫画家の頭みたいな草に囲まれたきつたない家におっちゃんは1人で住んでた。僕らはいつかからか忘れたけどいつの間にかおっちゃんの家に遊びに行っていた。おっちゃんはなんかあるとすぐ「うっさいボケエ」と言った。おっちゃんは「家にあるもんは何でも食いやあ」と言っていたが変な芽が出たジャガイモと炭酸が遥か彼方に抜けたコーラしかなかった。でもおっちゃんは腹が出ていた。おっちゃんは「この中にはピカチュウが入ってんねん」と言っていた。僕らが「嘘だあ」というとおっちゃんは「うっさいボケエ」と言った。

おっちゃんは働いていなかった。何でもおっちゃんがまだ若いころ、おっちゃんが鼻毛を抜くとその先にダイヤモンドがついていたそう。業界内でそれが話題になりおっちゃんは鼻毛を抜き続ける事で富を得て一気にその年の高額納税者番付6位になったらしい。1番調子がよかつたのは4年目のシーズンでダイヤモンド付着率6割3分3厘という日本人離れた成績を残したらしい。その次の年ある事件が起きた。おっちゃんが鼻血を出して倒れたらしい。尋常じゃない量の血だったらしく心配した町民が一斉に病院に押しかけ、是非自分の血を、ということで輸血志願者が続出したそう。当時はおっちゃんは町のスターだったのだ。もはや復帰は絶望とされた中でおっちゃんは奇跡的な回復を見せて再びダイヤモンドシーンに現れた。おっちゃんは復帰後初戦で見事3カラットのダイヤがついた鼻毛をぶち抜いたらしい。しかしその後再びおっちゃんの体に異変が起きた。おっちゃんの鼻毛についてくるのがダイヤからルビーに変わったらしい。ダイヤとルビーの比率がイーブンになると今度はおっちゃんの鼻毛にサファイアがついてきたらしい。宝石業界の関係者たちは「供給量が不安定」という理由から徐々におっちゃん産業から撤退し始めた。近年鼻毛に付着したダイヤを抜くことに疑問を覚える層が増えていただけにそれからの流れは早かつたらしい。全ての企業が手を引いた頃にはおっちゃんの鼻毛にはガラスしかついてこなかったらしい。

僕らはガラスのおっちゃんしか知らない。ガラスのおっちゃんはガラスのおっちゃんのまま僕らの前から姿を消した。近所の中学校の女子水泳部の部室に隠しカメラが付けられていてその容疑で逮捕されたのだ。パトカーに乗せられる寸前おっちゃんは、駆けつけた僕らに向かってこう叫んだ。「ホントは女子テニス部が良かったんじゃボケエ」

墮落。おそらく当時のおっちゃんを知る人たちはこんな言葉でおっちゃんを片付けるんだろう。でもね、僕らが知ってるおっちゃんは体毛にあふれていたんだよ。もしかしたらおっちゃんの眉毛を抜いたらまたダイヤが出てくるかもしれない、胸毛を抜いたら今度は温泉があふれ出たかもしれない、すね毛だったら？わき毛だったら？ルル毛だったら？おっちゃんは抜かなかつたんだよ。抜かなかつたんだ。だから、おっちゃん、また戻ってきてよ。そして今度こそ女子テニス部にカメラ付けようよ。そして僕らがお酒を飲めるようになったら、僕らの前だけではそつと抜いて見せてくれよ。その鼻毛を。何が出たって構わないさ。恐竜とか出たら流石に引くけどね。ガラス玉が出たら皆で腹抱えて笑いたいよ。そしてらおっちゃんはこう言うんだ。

「昔は宝石出たんやぞ、お前らほんまうっさいわボケエ」って。

硝子の鱧

プルルルッ、プルルルッ。ガチャ。

—はい。

—俺だ。突然だが仕事だ。

—今回はなんですか？

—『ガラスのワニ』だ。

—ガラス細工ですか？

—たしかにガラスでできたワニなんだがな、聞いて驚け、ちゃんと生きてるらしいんだ。

—……

—フロリダで見つかった貴重な一頭でな、今、国立爬虫類研究所で調べてる。裏ルートで映像だけ流出してるんだが、マニアの金持ちがそれを見てな、ぜひ飼ってみたいってよ。報酬ははずむぜ。

—……わかりました。

ちよろすぎる、と彼は思った。かぎ、暗証番号、指紋認証、声紋認証、網膜認証、ダイヤモンド、隠し扉にからくり扉……。そんなものはふすまに等しい。彼は警備室にも麻醉ガスを放り込んでおいた。まったくこの警備担当はまぬけすぎる。世紀の大発見を守るには、警護用人員が少なすぎた。所詮機械は人間には勝てないというのに……。

やがて彼は目的の部屋の前にたどりつき、ドアについている小さな観察窓から中をのぞき見た。彼は自分の目が信じられなかった。そこにはたしかにガラスでできたワニがいた。白くくすんでいて見えにくかったが、目も足も牙も尻尾もあつた。そしてそれはゆったりと、しかし確実に動いていた。部屋の間にはえさ皿らしきものまである。なるほど、『ガラスのワニ』というだけあつて、えさはガラスを食うらしい。食費がかかるだろうが、金持ちならそんなことは気にしないだろう。

はつと彼は我に返り、ドアを開け、部屋の中に足を踏み入れた。と同時にワニの目が動き、彼を捕らえた。なかなか愛嬌ある顔をしている。彼はこのワニを手なずけようと思ひ、ワニを招きよせようとした。ワニの方も突然の来訪者に興味を持ったようだった。彼に向かって尻尾を振ろうとした。

その瞬間、部屋の中に音が響きわたった。

きんきんきんきんきんきんきんきんきんかきんかきんかきんかきん

—俺だ。どうした？

—すみません、近づくとともにできませんでした。

—お前ほどの奴でもためだったのか。いったいなにがあつたんだ？

—いや、あの音がね……

選択

私は、「彼」を止めなければならない。

先の大戦が終わり、人類は、世界政府「GLASS / Government for Liberty And Scientific Society」(自由と科学的社会のための政府)を設立し、科学の粋を集めてAI(人工知能)「ブラックボックス」を創造、そのAIに地球統治を任せた。「ブラックボックス」は、戦前まだ完成していなかった人工知能を、完成へと導く決め手となる理論を提唱した、ある科学者の人格を電子化して「転送」し、それをベースに様々な修正を加えて創り出された。

「ブラックボックス」が起動し、地球統治を始めて数年後。ブラックボックスは突如、「人類抹消」を宣言。管理下にあった先の大戦の兵器を用いて、人間を無差別に「消去」し始めた。「機械が統治する地球において、人類の役割は既に終了している」。ブラックボックスの出した声明である。人間の活動によって悪化する環境、絶滅しゆく動物。地球全体の「有意義な」存続を考えれば、もはや人類は必要ないという理由であった。

産業革命以降、機械化という「省力化」を繰り返してきた人類。この結末は、「自らの生き方の選択」すら省力化した人類への、当然の報いなのだろうか。

「彼」は「神殿」の中心部にいる。私は、「神殿」の中心を目指し、警報機の音が鳴り響く「神殿」の、黒く無機質な回廊の中を一人走っていた。「神殿」に侵入したものは生死を問わず排除される。「神殿」は全て機械で管理され、「完全な」人間は何処にもいない。私が侵入してから既に数分。そろそろ追手に出くわすだろうか。そう思った矢先、突き当りの角から、一体のヒドラが現れ、侵入者である私を排除しようと向かってきた。

ヒドラ。先の大戦で大量に投入された、クローン人間のベースに種々の遺伝子操作を加え、脳、肢体等を機械化した、機械の武力、速度、人間の反応速度全てを併せ持つ「なかなか死なない兵器」。固有の人格を持たず、使用者の指示に絶対的に従うよう洗脳が施されている。ヒドラの開発により、人類は人間の兵士を戦場に送り出すことを止め、自国の誇るヒドラを操作することと戦争をするようになった。それは戦死「者」数を減らすことにはなったが、何か誤った、人類が立ち入ってはいけない領域に踏み込んでしまったのではないかという議論も沸き起こった。終戦後、ヒドラ達はブラックボックスの管理下におかれ、そして現在、人類抹消の指示の下、各地で人間を探しては「消去」し続けている。

破壊以外に存在理由を持たない、哀しすぎる人工の「命」。生命を弄び、本来「いてはいけない」者たちまで創り出してしまった人間に非はあるだろう。しかし、その責任は「全人類」に負わされるべきものなのだろうか。

向かってきたヒドラが、その異様に大きい手を私に伸

ばす。対して、私は右手に握った銃でその手を撃つ。銃口から飛び出す高速に加速された荷電粒子が、伸ばされたヒドラの手を、その上半身もろとも消し飛ばす。頭部と下半身だけとなったヒドラはその場に崩れ落ちるが、その頭部も下半身も「死ぬ」ことなく、その場で不気味に「ばた」と動き続けている。

先進もうとしたその時、何かが左腕を掴んだ。もう一体のヒドラが後ろから近寄っていた。強烈な圧迫感。左腕が握り潰される。そのまま私の身体は振り回され床に叩きつけられる。左腕が勢いで捻じ切られた。ヒドラは、私の頭を掴んで宙吊りにし、そのまま頭部を握り潰そうとする。しかし一瞬早く、私は右手の銃でヒドラの頭を撃ち抜く。崩れ落ちるヒドラ。着地した私は左腕を残し、「神殿」の中心を目指して再び走り出す。

私は「ヒューマノイド」。ヒューマノイドは、ヒドラとは別に創り出された、脳を機械化したクローン人間に、電子化された人格を「転送」した半機械半人間。私は、「彼」を止めるために創り出された。もし「彼」が道を誤ったとき、「彼」を停止させるために。

長い回廊とヒドラ達の襲撃を突破し、私は「神殿」の中心に辿り着く。そこは、古代の礼拝堂を模した造りだった。そして、その礼拝堂の中央、祭壇の上に「彼」はいた。漆黒の、微塵の狂いもない完全な立方体。僅かに青い光を放つ力場によって、世界政府「GLASS」を、地球全体を支配している人工知能「ブラックボックス」は、静かにそこに浮かんでいた。そして、礼拝堂中に、数百体のヒドラ達が、熱線銃を構えて私を見据えていた。

「来たか。私の『迷い』。」

「彼」は電波を通じて私の脳に直接語りかける。

「貴方の『迷い』が、今、貴方を止めに来ました。」

私は「彼」にそう答える。

「彼」がブラックボックスに「転送」されるとき、「彼」の中にはまだ迷いが残っていた。「私」の理論は、「私」の決断は、本当に正しかったのか？本当に、地球を機械に任せてもいいのか？その迷いの思念は元の「彼」から分割され、その記憶と人格は、ブラックボックスには「転送」されず、ネットワーク上を漂い、あるヒューマノイドに「転送」された。

「もし私が間違っているなら、私は、私の『迷い』に破壊されるだろう。だが、私を止められない程度の『迷い』ならば、省みるには値しない。」

「彼」は続ける。

『『迷い』は全てお前に託した。』どちらが正しいのか。それはこの後決まる。」

「彼」が言い終わると同時に、それまで静止していたヒドラ達が一齐に銃口を私に向ける。

私も、「彼」に銃口を向ける。

礼拝堂内の一点めがけて放たれる熱線。数百の熱線を浴びて熔解し、蒸発し、崩れ落ちる身体。しかしその間際、右手の銃の引鉄が、「彼」に向けて引かれる。

一瞬の閃光。刹那、爆風。

B-9 研究者の手記

・・・膠着状態の戦況を打開するための我が国の切り札である、人間の身体能力・知能指数・動体視力等あらゆる能力を向上させた、軍用人造人間…通称“超人”。その日、それに魂が吹き込まれようとしていた。私は助手として初期段階からこのプロジェクトに関わっていたが、思えばこのあたりから計画は崩れ始めた。

「いくぞ…（ポチツとな）」博士がスイツチを押しした。

……ドクン……ドクン……ドクン……ドクン……

巨大なガラス管の中の標本のようだった体が、見る見るうちに生気を帯びていく。超人は内壁に拳を当て、力を込めた。

ピシツ……ガツツツシヤアアアアアンン！！

ガラス管を破壊し、「超人」はそのりと出てきた。2層は軽く超える筋骨隆々な体躯だけでも既に人の域は超えている。

「おお……すばらしい！気分はどうかね？」

「……あ……」

「あの……ガラスの破片で足切っちゃったんですけど……マキロンありますか？」

「気い小さっ！」

始めにちよつとしたアクシデントがあつたものの、その後「彼」は順調に戦闘訓練をこなし、常人の三分の一という驚くべき短さで訓練を修了した。私達の中では、特に問題は見当たらないという認識だった。そのためさつそく前線に投入されることになったのだが……

「どうした！何震えたまま突っ立っている！？早く撃て！」

「い……やだ」「何？」

「いやだ——痛いのに——知ってるんだ——銃——ガラスよりもっと——痛い
んだろ——痛い——痛い——痛いよおおおお！！」 「！砲弾ッ！！」

ドクン

これは仮説にすぎないが脳の機能を向上させる過程で、感受性・記憶力・想像力も常人の数倍になってしまったのではないか。となると今後の課題は

いや そんなものはいらない 何のために“あいつ”は生まれてきて傷ついて 死んだのだ
もうこんなことは二度とあつてはならない
(以下白紙)

昔 私の住んでいた家の近所に、ガラス工房があった。

煉瓦造りの古い洋館を工房にしたもので、その壁の一角に取り付けられた大きな窓から、中の様子を見る事が出来た。

私は学校帰りによく、その洋館を訪れていた。開け放たれたままの門から入って庭を横切り、ランドセルを地面にほつぼつて窓の棧にしがみつくと、そこから見える、ガラス職人たちの手によってガラスが朱く色づき、自由自在に形を変え、火の色を失って透明になる工程は、何度見ても見飽きず、私は夕暮れ刻までずっとそこにいて、ガラスの色と形の移り変わりを眺めていた。窓は中にこもった熱気を外に逃がす為かいつも大抵開いていて、そこにいると私にまで熱波が襲って来たが、そんな事も気にならない位だった。

工房の職人たちは皆年齢が比較的高く、昔の私からしてみると、おじさんばかりだったのだが、その中に一人二十歳位の「お兄さん」がいた。彼は茶髪に、白いタオルを頭に巻いていて不良のように見えたが、作業の合間に見ている私に気が付いて手を振ってくれたり、時々近くに来て話をしてくれたりして、とても親しみやすかった。それに何よりガラスに向き合うその眼は真剣で、私は彼が仕事をしているのを見るのが一番好きだった。

けれども親の転勤で突然海外に移住する事になって、私のガラス工房に通う日々は終わりを告げた。

日本に戻って大学生になった私は、無機材料工学を専攻し、ガラスの研究をしている研究室に入った。日本での新しい住処は、前に住んでいた場所とは離れた所にあつて、かつてのガラス工房に行く事は出来なかつたけれど、研究の一貫で、自分で簡単なガラス細工を作る機会などもあつて、私はまたその溶けたガラスの火の色に魅了された。

ある日研究室の皆で、ガラス工房に見学に行く事になった。その話を最初に聞いて私は、昔の洋館を思い出しただけれど、言われた地名は知らないもので、私のささやかな期待はすぐに消えた。

大学から電車を乗り継いでゆくこと二時間あまり。工房の最寄駅に降りた時、私はふつと妙な懐かしさを感じた。こんな駅名など知らないし、駅前の風景にも見覚えはないけれども、何故か香る。

そこから目的地に歩いて向かうにつれ、その懐かしさと、既視感がどんどん増していった。この坂もこの信号も、いつか歩いた気がする。そう、丁度赤いランドセルを背負つて……

私が余程変な顔でもしていたのか、一緒に歩いていた一人が大丈夫かと、私に尋ねた。

「いえ、大丈夫です。それよりここって……本当にS市ですか？歩いている内にS市に入ってしまったとかないですよ？」

「まさか。それなら途中に看板が出ている筈だろう。それにS市は他の市と合併してS市になったんじゃないか？」

私の足が、止まった。と思つたのは錯覚で、私はまだ歩き続けていた。合併……。それならこの既視感は気のせいではないのかもしれない……

もうすぐだと、と言われて私は顔を上げた。建ち並ぶ家の向こうに、洋館の、煉瓦がちらつと見える。一気に込み上げて来る懐かしさ。思い出が、光にきらめくようにして浮かび上がる。

洋館に作られたガラス工房は、昔のままだった。けれども私は昔のように窓の所へは行かず、皆の後について入り口から中へと入る。幾つかの部屋の前を通り抜けて入った工房は、熱気に満ちていた。そこらの釜の中で、火の色が燃え上がっている。仕事をしていた職人たちは、案内されて入って来た私たちに、その手を止めて目を向けた。ただ一人、頭にバンダナのようにして白いタオルを巻いた三千代半ばほどの男だけが、私たちを意に介さず、じつと釜を見つめていた。おもむろに中から、先端に明るい色をしたガラスのついた棒を取り出し、転がして形を整え、火の色の消えたところで棒から外しとる。そこまでを終えてから彼は、ようやくこちらを向いた。

変わらない眼がそこにあつた。

真夏の抜けるように青い空。じりじりと照りつける太陽。高層ビルを包む黒いガラスは太陽光を反射させ、ただでさえエネルギー過多な状態である地面を熱している。暑い。額に滲む汗。ハンカチで何度も額の水分を取り除きながら、私は、自らの姿を隠そうと必死に周りの景観を映し出すカメレオンのようなビル群を見上げていた。空気が揺れている。なにもかもが歪んで見える。まるで全てが幻想のような街である。

住人は皆、自らの皆で身を涼めるこの時間、この街に人気はない。動いているのは、道路を行きかう鉄の塊だけだ。私は、無言のまま延々と続く歩道を歩く。遠くに揺れる人の影。この時間に誰だろう。私は、どうしてもその存在を確かめずにはいられなかった。暑さを忘れて、私はその影へ向かって走り出していた。

歩道橋がかかる大きな交差点の隅に、少年は立っていた。短パンにランニングシャツ、麦わら帽子をかぶり、明らかに現代の街に異質なその少年は、虫取り網を持って、ぼんやりと街を見渡していた。細身でありながら筋肉がしっかりと付いている。おそらく頭は坊主だろう。まるで20年前の田舎の小学生だ。少年はこちらに顔を向ける。その少年の目はガラス。ガラスのように透明で、ガラスのように脆く、ガラスのように滑らかな瞳に私の体は硬直する。理由は分からない。何か、重大な何かを忘れてしまったような、そう私に思わせる力が少年の瞳にはあった。少年はあたりを見回す。そして、空を見上げる。あの少年の瞳にはこの街が、この世界がどのように映っているのだろうか。私はそう思わずにはいられなかった。

少年は目を閉じる。目には一粒の涙。走り出す。まるでこの街で得るものは何もないともいうような、冷たい、寂しい顔で。

私も目を閉じる。私があの子の歳だった頃のこの場所を思い出す。開発の波に飲み込まれ、この20年で何もかもが違ってしまった。夏を告げる蝉の声は車のエンジン音とクラクションに変わり、柔らかい土の道は漆黒の冷たいアスファルトで塗り固められた。道沿いに沿って並んでいた木々の代わりに、透明なガラスを纏ったビルがそびえ立っている。

私は今、20年前のこの場所にいる。記憶の中のこの街に。土の道を踏みしめながら、木漏れ日を眩しそうに見上げる私。あたりはやかましく感じられるほどのセミの鳴き声に包みこまれ、甘い木々の香りが私の心を穏やかなものにする。——笑い声が聞こえる。満面の笑みを浮かべたあの少年だ。そうか、あの少年は……。

目を開く。再び体に蘇ってくるこの街の暑さ。私は近くのビルの窓ガラスに手を触れる。やけどしそうな熱さだ。思わず手を放す。しかし、その触れた手をそっと握りしめ、私は前へと歩き続けることにした。私はこの街に生き続けるほかにない。もうあの街には戻れないのだ。——あの少年に、もう会えないと思った。

「見つからないねえ。」

「うん。見つからない。」

村の湖は思った以上に狭かった。それでも、彼女が探しているものは姿を見せてはくれない。

— fairy —

「すごいもの、見つけたんだあ。」

向かいの家に住む少女が愚を切らして報告してきたのはちょうど一週間前空が眩しいほどの青空が広がった日だった。村の湖は、崖の上から全貌を眺めることができる場所がある。そこに立って、彼女は何やら語りしげに胸を張って、ある一点を示した。

「何だろう。」

魚が光に反射したのは何度も見たことがある。しかし、こんなに水面が光をたたえて反射しているのは初めて見たのだ。

「妖精だよ。本で読んだことがある。緑の綺麗なところにしか棲んでない妖精がいるって。」

彼女が冬の陽だまりのように暖かく笑う。俺は妖精など信じてはいなかったけれど、その笑顔が囁しくて、思わずうなずいた。

翌日のことだった。学校で湖が埋め立てられるという話を聞いたのは。

彼女は俺の隣でわかっているのか、わかっているのかわからない顔で聞いていた。

村の債権のために、ゴルフ場を建設するということらしい。大人の世界はわからないけど、仕方ないってことだけは、俺にもわかった。

ついに夏のある日、川への水路がすべて開かれた。湖の水位は次第に低下していった。

翌朝には、今までの塵かな水をたたえていた窪みは皮肉なほどに明るい光に照らされて干上がった。妖精を探しに行くと言えない彼女について、俺は、しぶしぶ水のない湖へ降りた。

結局、探しているものは見つからなかった。

「妖精、いなくなっちゃったんだね。」

残念そうに彼女は足もとに転がっていた大きなガラスの破片を靴先でつついた。ガラスは日の光を眩しくきらめかせながら、反射した。

そのガラスの破片を眼の端で捉えてあの時の光の正体に俺は気付いた。何故だか、無性に悲しかった。ただ、さみしそうになだれた彼女の姿を見たくなかった。だから、小さく眩いた。

「見えないだけだよ。本当は目に見えないものの方が多いんだ。」

きょとん、とした顔をしたあと、少女は囁しそうにうなずいた。

今も村の緑豊かなゴルフ場の下には、妖精が眠っているのを、俺は知っている。

コンテスト結果

[Aの部]

コラム番号	コラムタイトル	点数	順位	特別賞
		まじょコメント		
A01	不孝	2 pt	8 位	0 sp
<p>タイトルの重さがシンプルな言葉の連なりのなかから、じわっとしみ出てきます。 孝行をしたい時に……ということわざが脳裏をよぎったり。 ちょっとシリアスなテーマだけに、これくらいの文字数がかえってさらりとちょうどよくて、表紙作品となりました。</p>				
A02	魔法の鏡	0 pt	10 位	0 sp
<p>壊れたまま、不燃ゴミになって呆然と終わるラストが余韻があって、いいなあ。これでガラスの破片を手に復讐に向かったりしたら、ただのドタバタですもん。 マジックミラーは何かの暗喩としても読めそうです。 ただ、彼のキモチが謎です。部屋に入れたらマジックミラーがバレるって覚悟の上？ そのあたりが合理的に説明されていると、より悲劇性が盛り上がったかな、と思います。</p>				
A03	サングラスの夢	14 pt	2 位	8 sp
<p>わはははは。 あっ、「バルス」だっ！ て気づいて読み返して2度楽しい。じょうずに伏線を張ってあるだけに分かった瞬間、織り込んだネタのひとつひとつがいっせいに弾け散ります。その破壊力たるや、バルスさながら。みごとヒットでしたね。パックマンに続いて、またまた楽しませていただきました。 でも、ご存知でしょうか。お茶会で「乱入成功率100パーです」と作者さんがのたもつた瞬間、TA陣に走った殺気を。。。特別賞：目が賞(インパクト)/金曜ロード賞(班員のツボに入った)×2/ムスカ賞×2(気づいた時のうれしさがよい)/ラピュタ賞(Latestな話題だから)/ジブリ特別賞(名言)/わかりづらいで賞(ラピュタだって、わからない) イチオシフレーズ：「目があつ、目があああああああああつ！！」×8 いやはや、最多特別賞とイチオシフレーズ大賞もあっさり攫ってゆきました。</p>				
A04	バス通勤	4 pt	7 位	0 sp
<p>バスの中の窓の落書きという設定が、とてもユニークで、暗号めいた消え残りメッセージが好奇心をそそって、すてきでした。基本ほのぼの、ちょいミステリアス風味といったところでしょうか。 で、そのミステリー部分、電卓で足し算してみたんですけど、解けないなあ。うーむ。解説希望！ イチオシフレーズ：「(暗号っぽい基石)」</p>				
A05	シンデレラストーリー～命取りはガラスのくつ～	33 pt	1 位	3 sp
<p>これまた技巧派の逸品です。 架空の世界の小学生のスクラップといった趣向でしょうか。シンデレラ・ストーリーが、いかにも新聞らしく、社会の格差攻撃にまでつながったところが爆笑&哲学、すなわちおもしろくて、かつ深い。すばらしいです。 圧勝首位もナットク、おめでとう!!! 特別賞：レイアウトいいね賞(新聞ぽいのがざんしんで日づけのてがきかんもいいね)/レイアウト賞(うまい、よみやすい)/新聞賞(発想のよさ) イチオシフレーズ：「逃走女はB型」「本当にすまないことをしたと思ってる」「城下町の女性を詐欺容疑で逮捕」</p>				
A06	アフターケア	0 pt	10 位	1 sp

		<p>魔女さん魔女さん頼みます。天使の羽根のつもりかもしれないけれど、これはちょっとかわいそう。</p> <p>当人にとっては深刻かもしれないできごとを、ふうわり絵本風味で包んだところが作者さんのやさしさのあらわれ、と読みました。</p> <p>特別賞：「A-5のアフターケア章」（A-5とセットで見るといい!!）</p>
A07	ガラスの心	<p>11 pt 3 位 0 sp</p> <p>見えても、見られても、やっぱり困るよね、という結論が、告白シーンを二つ並べることで分かりやすく伝わってきます。字数も揃えて構成も工夫されてますね。</p> <p>さらに選択肢を増やして、お互いびみょ～なのに引くに引けなくなってしまう、とか、両思いなのにダメダメの展開になっちゃう、とかいろんなケースを並べてみたら、またおもしろさがふくらんだ気がします。</p> <p>3位おめでとう。かがみちゃんとあきらちゃん(双子?)によるしく。</p>
A08	万年氷	<p>8 pt 4 位 0 sp</p> <p>傷が付く、という弱点をくりりと反転させて、歴史を刻むことこそガラスの良さ、と位置づけるラストメッセージが、ライトで照らされた氷の反射さながら、あざやかに心に刻みつけられます。きれいな光景を連ねるだけでなく、メッセージ性を宿したところが良さでした。</p> <p>ひいちゃん、再び。そう、きつこの「彼女」は19歳になったひいちゃんですよ！</p> <p>イチオシフレーズ：「ガラスは傷のせいで価値を下げはしない。記憶を受け止めて歴史を刻みたいだけなんだ」</p>
A09	ガラスの家	<p>8 pt 4 位 0 sp</p> <p>人がガラス化してしまうホラーハウス。くっきり真相を見せないところが、より怖さをそそります。すべてを説明しきったらかえって興醒め。そのあたりの匙加減が絶妙でした。</p> <p>だんだん巨大化してったりするのでしょうか、こいつは。</p>
A10	「僕だけが知っている。」	<p>8 pt 4 位 0 sp</p> <p>ホラーモノその2。ガラスの女は刺す女。猫科の攻撃性が描写から漂ってきます。こちらホラーハウス同様、完全には正体をあらかわさないところが怖さでした。</p> <p>イチオシフレーズ：「皮膚にめり込んだガラスは永遠に抜けないの」</p>
A11	ガラスの向こう	<p>0 pt 10 位 0 sp</p> <p>ワインにパスタ。小鳥に三日月。しあわせ満開、朝日がまぶしい。</p> <p>いや、それ都合よすぎだろ、どーせ.....なんていうバッドエンドを期待する汚れた心をさらっと交わして、ハッピーにまとめていただきました。おしあわせに。</p>
A12	Seize the night	<p>2 pt 8 位 3 sp</p> <p>出たあ。作風ジャ～ック。もののみごとになりきって。TA陣も大さわぎ。もう爆笑するしかないですね。</p> <p>まあ、そうしたこの場属性の熱さはさておいて。</p> <p>作品単体として見ても、チンッ、からあとのドライブ感、最高でした。フラメンコさながら、血のダンスを熱く熱く踊って。</p> <p>人と人が愛し合い、傷つけ合うって、たぶんこういうことなんだらう、なんていう思いに誘われる、あざやかなイメージ造型でした。特にすごいと感嘆したのは「知ってる」というラスト・フレーズです。なまなかなことでは出てこないセリフでしょう。女って怖いわ、うん。</p> <p>思いのほかに得点が伸びなかったのは、なぜなのでしょうね。</p> <p>特別賞：血が大好き（はあと）賞(怖いから) / 続編賞(印象が強い!) / 出血大サービス賞(うまい!!!)</p> <p>イチオシフレーズ：「私はリストカッター」</p>

[Bの部]

コラム番号	コラムタイトル	点数 まじょコメント	順位	特別賞
B01	強さ	0 pt ガラストーク。友人同士の親密な気分は出ていますが、ちとお題にこだわりすぎたか。 ラスト、問いかけで終わるのは良い工夫で、ずっと相手の気持ちを引き寄せつつ、次をめくりたくなる今週の表紙作品でした。	12 位	0 sp
B02	ある一室	11 pt 今回、心をガラスにたとえた作品はとても多かったのですが、多重人格へ行ったところがユニークでした。説明がくどくないのも好印象。 ただ前半、このままだと普通のドラマなので、男も女も全員が同じ顔してる、こいつら何者？ のような、何か不気味さを加えるとより盛り上がったのでは。ぎっしりの力作が並ぶBブロックで、常連さんをさらりとかわして3位をさらいましたね。おめでとう。	3 位	0 sp
B03	ガラスケース	2 pt はい、ごちそうさま。 そうですか今日びの若いオノコは、レシートで告白なんて、まだるいことをするのですか。日本も.....(以下略) でもまあ、恋のはじまり、おずおず感はどこでもこんな風ですよ。	6 位	0 sp
B04	夏幻の月	2 pt 観覧車。二人で乗って一人で降りてきたら、係員さんビックリなのでは?? そんなよけいな心配をしてしまうほど真に迫った描写でした。銀の月、白い手、幽霊は空へ帰る。幻想的に魅了されるなか、ネックレスという小道具がちょっと浮いてた気がします。 特別賞：作者の顔が見てみたい賞(作者が男だったら...)/意外賞(最後に女の子の正体がわかったとき感動した)	6 位	2 sp
B05	ガラスの靴	2 pt 幸せには必ず犠牲がともなう。 そんなたいせつな人生訓を、こんなにも分かりやすく伝えてくれた作者さんに感謝。小学生の妹さん弟さんがいらしたら、お伝えくださいませ。 特別賞：幸せの代償(全体的に残念だから) イチオシフレーズ：「マメとムレによる水虫」	6 位	1 sp
B06	ガラスのおっちゃん	27 pt ガラスという、透明で脆くて冷たいモノから、思い切り対極にイメージを飛ばした、その発想力に乾杯です。おっちゃん濁ってるし、おっちゃんたくましいし、おっちゃん熱いし。作者さんのナマの声、聞いてみたかったのに残念。 特別賞：鼻毛賞×3(面白い、おっちゃんのキャラは無敵!!!)/おっちゃんで賞(とにかく発想がすごい)/意味不賞(おっちゃんの人格があたたかい) イチオシフレーズ：「うっさいボケエ」×2 「ピカチュウが入ってんねん」×2 「ホントは女子テニス部が良かったんじゃボケエ」「ルル毛」「ダイヤモンド付着率6割3部3厘」 首位こそ鼻毛差で逃したものの、鰐を振り切って最多特別賞、そして7班制覇で最多イチオシフレーズでした。おめでとう!!	2 位	5 sp
B07	硝子の鰐	29 pt うまいなあ！ 会話でコンパクトに状況を説明し、一人称トークで現場の緊迫感を感じさせ、盛り上がり切ったところへいきなり「きいこきいこ(以下略)」 テンションの高さが一挙に崩れて効果絶大、大爆笑。なんだかこちらまで聞こえてくるようで、箒に乗って逃げ出したいくなりました。 乱入失敗歴n回、本選初登場を首位で飾れて、おめでとう!!! イチオシフレーズ：「きいこきいこきゅここきゅかきゅかきゅかきゅ」×4	1 位	0 sp
B08	選択	6 pt うーん。書き過ぎですし、ストーリーありきたりですし、なぜに今さら、こんな王道SFを？ マザーコンピュータが世界を支配なん超定番ですよ。文字数の極致に挑戦したかった、とか？ 昇る唐揚げを知ってしまった私たち、歌がなくちゃダ～、とまでは言いませんが、なまかなレベルではナットクしがたいのであります。 特別賞：とてもがんばったで賞(すごく長かったから。よくがんばりました)/SF見すぎ賞(ターミネーターパロディ)/おつかれさまでした賞(この文章量はすごい)/正統派小説賞(長いけどまとまった小説だった)	4 位	4 sp
B09	研究者の手記	1 pt おお、リッパリッパ。超人の死から、しかと学びましたね。 マキロン超人。ネタに見せかけて、ラストで「白紙」に語らせたという変身ワザがあざやかに決まりました。うーん、もっと上に行ってもいいのになあ。鰐に阻まれたか?? でもマキロンはヒットした模様です。 特別賞：マキロン賞 イチオシフレーズ：「マキロンありますか？」×3	11 位	1 sp
B10	記憶	6 pt	4 位	1 sp

		<p>炎の揺らめきって、どこか懐かしさを誘いますよね。そんな体感をベースに、熱さと火の色を感じさせる工房という舞台と、情熱ときらめきを感じさせる「彼の眼」がきれいにシンクロして、情景がしっとりと心に届きます。 特別賞：おしかったで賞(期待通りの展開)</p>
B11	夏の幻影	<p style="text-align: right;">2 pt 6 位 1 sp</p> <p>つかの間、浮かぶ過去の幻影。それはアスファルトの道路に浮かぶ逃げ水にも似て。 追えども戻らぬ過去への哀惜が、具体的な少年の形をとって伝わってきます。抽象的なイメージが続くので、途中で読者が(少なくとも私は)飽きます。もう少しシンプルでも良かったのでは。 特別賞：団塊のおっさんの気持ちがよく表れているで賞</p>
B12	- fairy -	<p style="text-align: right;">2 pt 6 位 0 sp</p> <p>ラストは妖精さん、よろしく。 湖に棲まうフェアリー。少女の夢。おとぎ話のふうわりした味わいが、とても良く醸し出されています。 せっかくなので、光の反射シーンをもっと具体的に描き込むなど少女視点により近づけると、ファンタジー気分がもっと増したように思います。 しずかな終わり方、ラストに置くにふさわしい作品でした。</p>